

教育長だより No. 2

2022年4月2日

学級びらき (学級づくりの第一歩)

～ 一年のはじまり：学級担任の最初の山場『第一声』 ～

いよいよ新しい年度が始まります。新しい先生が多いので、昨年と同じような内容で、一年のスタートにおいて書きました。学級集団づくりや授業づくりの参考にしていただけたら嬉しいです。(この文は「小学校高学年以上むけ」ですが、就学前などでは、どこかの機会で保護者さんむけにアレンジしてお話いただければと思います。)

子どもたちが最も耳を傾け、緊張しているこの日(始業式後の学活の時間)は、学級担任が迎える最初の「山場」です。新しい担任の先生との「初めての出会い」に、子どもたちは大きな期待とちょっぴりの不安を持って、担任の先生の『第一声』(だいいっせい)＝「初めての語り」を待っています。さすがにこの日ばかりは「静かにしましょう!」と注意をするまでもなく、子どもたちの集中力は最高レベル。こんなチャンスはありません。「第一声は、1年間の半分くらいの力量をかけるんやで。」私は、まだ教師になりたての頃、先輩のこんな「ハッパ」に緊張したものです。なお、「学級びらき」は学級を子どもたちの「居場所」とするために行うものです。ゆめゆめ数分で終わってしまわないようにしたいものです。(そのために、諸連絡はプリントに印刷し、配布物は子どもたちに手伝わってもらうとかしましょう。)

さて、『第一声』は「学級をひらく」のですから、まず担任である先生が「自分をひらく」ところから始めます。自分をひらくとは? 人と人がつながる(つまり、なかまづくりの)土台です。説明します。

まず、先生自身が「自分はどんな人間なのか」「何に喜びを感じ、何に怒りや哀しみを感じるのか」「なぜ教師になったのか」など、これまで出会った子どもたちのことや自身の生いたちなども含めて具体的に語ります。エピソードを入れて話すといいですね。例えば、私が現場にいた頃話した一つに「自分の名前」(名前は親からの一番の贈り物。子どもの自尊感情を育むタカラモノです。)があります。『第一声』は、先生が子どもたちに「自分をひらく」モデルを見せる最初の大切な場です。学年会などで学級開きの教師間の事前交流ができればステキですね。もちろん、ここはベテランの先生の腕の見せどころです。

次に、この一年間を「どんなクラスにしたいのか」「どんなことをクラスに求めるのか」など、目標を示して先生の学校や学年、そして、学級の集団づくりにかける思いを語ります。クラスのイメージを語る時には話の中に過去に持ったクラスや子どもたちに登場してもらい、できるだけ具体的に話しましょう。また、そうした経験のない先生は、自分の子ども時代を思い出してそこから話すという手もあります。そうして、先生の話聞いて、子どもたちが頭の中で「絵を描く」ことができるように話せばベストです。これで『第一声』は終わりです。初日ですからくれぐれも配布物等に時間をとられないように!

さあ、次は子どもたちの番です。まだ子どもたちがみんなの前で「自分をひらく」までには至っていないでしょうから、こうした先生の『第一声』を聞いて自分がどう思ったのかを作文に書いてもらいましょう。これが初日の唯一の「宿題」です。もちろん、2～3行ではその子の思いはわかりません。できればノート1ページはほしいです。また、原稿用紙を配ってもいいですね。ただ、学力のしんどい子への配慮は忘れずに。例えば、夕方や夜にその子に電話して、最後に「書けなかったら、3行でもいいよ。」っと。

次の日、子どもたちの「宝もの」の作文が続々と集まってきます。新しいクラスのスタートに、先生だけでなく子どもたちも「燃えて」います。できれば、子どもたちの決意が発表できる場(学活)を持つといいですよ。だれもが「前向きな思い」を出してくれると思います。新しい発見の場となるはずです。